

東北大学と科学哲学の伝統

野 家 啓 一

一 東北帝国大学創設と澤柳政太郎

東北大学と「現象学・実存哲学の伝統」であれば、誰しもさもありなんと納得するに違いない。とはいえず「科学哲学の伝統」と言われれば、むしろ首をかしげる人の方が多いはずである。だが、日本で初めて「科学哲学」の講義を開講したのは、まぎれもなく東北帝国大学理科大学（いまの理学部）なのである。このことは歴史の塵埃の中に埋もれてしまっているが、改めて強調しておくに値する。

東北帝国大学は、制度上は一九〇七年（明治四〇）に「東北帝国大学設置に関する勅令」によって創設された。だが、仙台に理科大学、札幌に札幌農学校を母体とする農科大学が開設され、二つの分科大学（学部）を擁する東北帝国大学が実際に開学し、授業が行われたのは、その四年後の一九一一年（明治四四）のことである。この年、初代総長には少壮の文部省官僚で教育学者の澤柳政太郎が、第二代総長には哲学者西田幾多郎や宗教者鈴木大拙の恩師として知られる数学者の北條時敬が就いた。当時は理科大学など分科大学のトッ

プが「学長」（現在で言えば「学部長」）という職名であったため、複数の学長を統括する役職が「総長」と呼ばれていたのである。澤柳は総長に就任するに当たって、大学教育について以下のような明確な理念を抱いていた。

「専門教育に於ける最高教育は、当時の文明が有する処の最高の知識を与ふるを以て満足し、直に之を応用せんとするものであるが、大学はさらに進みて、新たな進歩を企て、文明の先頭に立って進まんとするのである。（略）さて其の研究、深い研究のためには広き設備を要する。一分科の研究をするのにも、いろいろ之に関係ある他分科の書物や実験場がなくてはならぬのである。（略）此等の諸点を考へ合せれば、大学は総合制でなくてはならぬことが明瞭になるであらう。」¹⁾

最後の「大学は総合制でなくてはならぬ」という主張は、今日でいえば大学は理系学部と文系学部をともに傘下に包摂する総合大学であるべきだ、ということを意味する。「精神なき専門人（M. ウェーバー）」ではなく、総合的知識人の育成を目指したのである。そのため澤柳は、東北帝国大学にいずれ文系学部が加えられるのを見越して、友人の狩野亨吉が所蔵していた江戸の古典籍を中心とする十萬冊を超える膨大な書籍を一括購入するという英断をくだした。この蔵書は現在「狩野文庫」と名づけられて東北大学附属図書館に納められており、「江戸学の宝庫」として研究者に公開され、日本三大文庫の一つに数えられている。先見の明と言うべきであらう。

やがて一九二二年（大正一一）に法文学部が新設されたことで、澤柳の構想は完成を見るにいたる。法文

学部という形をとったのも、財政上の理由があったとはいえ、「法律を修むるにしても、哲学、社会学、心理学、倫理学など文科的の補助を必要とする」という澤柳の考えを反映したものである。

二 田辺元と「科学概論」

澤柳政太郎は、初代総長として仙台の地に赴任するに先立って「東北帝国大学理科大学規定」を起草し、そこで新大学の目標を掲げた。澤柳の評伝を著した新田義之は、その特色を次の三点にまとめている（以下は要約^③）。

(ア) 各科共通随意聴講科目として「科学哲学」「教育学」「工業経済学」「外国語」などを設け、いわば専門を超えた教養を身に着けることを奨励した。

(イ) 授業料免除の特待生制度のほかに、待給、補給の制度を設け、生活補助費や特別研究費を給付した。

(ウ) 入学資格者の範囲を従来の旧制高校卒業者のみとせず、各種の高等専門学校卒業生や中等教員免許状所有者などに広げ、いわゆる「傍系入学」を認めた。

澤柳は、優れた専門研究者になるためには、その知的基盤となる普通教育（一般教養）が不可欠であると考えていた。しかし、旧制高校出身者以外の師範学校卒業生など「傍系」入学者には、そのような機会が与えられていなかった。そのために彼は、「どの学科の学生でも受講できるように共通随意科目を豊富に準備

し、専門家にふさわしい高い教養を身につけるための便宜を提供すること」に意を用いたのである。^④

この共通随意科目の一つとして開講されたのが「科学概論」であり、一九一三年（大正二）にその初代担当講師として招聘されたのが、少壮気鋭の哲学者田辺元であった。田辺は「科学概論」を講ずるかたわらドイツ語の初歩も教えていた。当時の講義をまとめた著作『科学概論』（一九一八年）は澤柳政太郎に捧げられており、その「序」には次のような言葉が見える。

「此書の内容は余が東北帝国大学理科大学に於ける随意講義として科学概論の名の下に述べた所を修補したものである。（略）余が始めて当地の理科大学に哲学の随意講義をなすべき任務を委嘱せられたのは今より五年以前澤柳政太郎先生が総長の職に居られた時である。爾来先生は屢々余を戒めて哲学学徒たるものは自家の哲学組織を有せざるべからざることを力説せられた。（略）此書は内外の關係に於て其存在を澤柳先生に負ふ所が多い。是れ余が此書を先生に献じて感謝の微意を表せんと欲する所以である。」^⑤

この「序」において田辺が謝意を述べて言及しているのは、澤柳のほかは西田幾多郎のみである。そのことから、哲学者としての道を歩み始めた田辺にとって、澤柳の存在がいかに支えとなったかを物語っている。ところで、この「科学概論」とは田辺にとって「科学哲学」にほかならなかった。「序論 科学概論とは何ぞ」の第一節「科学概論の語義」に田辺は次のように記している。

「是より余が説かんとする所の科学概論といふは *Philosophy of Science, Philosophie der Wissenschaft* の訳

語である。科学概論といへば個々の特殊科学に限らず、一般に諸科学に共通なる真理を説くことを意味するものと思はれるが、斯かる諸科学一般に通ずる真理なるものは個々の科学ならぬ哲学の立場からのみ考究することが出来る。余は科学の概論なるものが哲学の一部としてのみ可能なりと信ずるに由り、『科学の哲学』の意味に科学概論といふ語を用ゐた。『科学の哲学』、精しくは科学の哲学的考察といふのが余の謂ふ所の科学概論である。^⑥」

このように、田辺は随意講義科目「科学概論」のことを内容的には「科学哲学 (Philosophy of Science)」であると言いつ切っている。その中身を敷衍すれば、「即ち哲学は科学の存立する後から其根底を探らんとするものであつて、何処までも忠実に科学研究の事実を認め、其よつて立つ所の基礎方法を明にせんとする」^⑦ものであり、あるいは「即ち科学概論とは科学が依つて立つ所の根柢を探りて其認識の意義を知り、その实在に對する關係を明にせんとする研究に外ならない」ということになる。^⑧今日の言葉で言い換えれば、科学概論とは科学方法論、科学認識論、科学存在論の考究ということになるであろう。先に、日本の大学で初め「科学哲学」の講義を開講したのは東北帝国大学理科大学（現在の理学部）と述べたゆえんである。

三 田辺元と東北帝国大学

田辺元が理科大学講師として赴任した一九一三年（大正二）、東北帝国大学は文部省の反対を押し切り、理科大学に女子学生の入学を許可した。化学科に黒田チカと丹下ウメ、数学科に牧田らく、の三名である。

当時、帝国大学に女子学生の入学を認めることは画期的なことであり、これには澤柳の「門戸開放」「研究第一主義」の理念を受け継いだ北條時敬の決断が大きい。澤柳が導入した「傍系入学」の範囲には、当然ながら女子高等師範学校の卒業生も含まれていたのである。

当時の状況を澤柳は「女子も中学教員免許状を持って居る者は拒むに及ぶまいといふのでありますが之は単り私の考へばかりでなく仙台の理科大学の教授は皆殆んど同じ考を持って居つたのであります」と述べている。理科大学の初代の教授陣の進取の気性と意気込みを窺うことができるエピソードである。丸山久美子によれば「しかし、文部省の対応が芳しくなく、第二代総長・北條時敬が赴任した時にはまだ女子学生はひとりもいなかった。北條は、澤柳初代総長のかかげた理念を實踐するべく、仙台と東京を何度も往復して文部省と折衝し（略）ついに文部省専門学務長から『女性入学に関する照会状』を取り付け、日本で初めての女性の帝国大学生受け入れの許可を得た⁽⁹⁾」のである。最初の帝国大学女子学生の一人となった牧田らくは、後に次のように回想している。

「全国に先駆けて女人禁制を解いたのは、前総長澤柳政太郎の英断である。（略）大学は本当に楽しかった。理科は創立三年目で、先生も学生も一生懸命です。ただただ勉強でした。寄るとさわると数学の話です。林鶴一教授宅をよく訪問しました。図書館にフランス語の本がはいると、あなたの本が来たと言われた。（略）本多光太郎教授の物理学理論や田辺元講師の科学概論の講義も聞いた。数学と無関係ではなかった。」⁽¹⁰⁾

日本初の女子学生の誇りと心躍りが聞こえてくるような文章である。林鶴一は数学科の初代教授で和算資

料の集書家としても知られている。林が創刊した『東北数学雑誌』は、初めは彼の個人雑誌であったが、研究成果の海外発信を目指した澤柳の方針により、大学の刊行物として採択され、現在では著名な国際的数学誌として知られるにいたっている。また牧田が聴講した「本多光太郎教授の物理学理論」とは、『物理学通論』を教科書として用いた講義と思われる。それを増補改訂した『物理学本論』の「序言」には「余は大正四年元第二高等学校教授川北清氏と共に大学初年級の学生用参考書として物理学通論を編纂した」とあるので、ちょうど牧田らの在学時期と一致する。

田辺元の「科学概論」についてはすでに触れたが、牧田が「数学と無関係ではなかった」と述べているのは、『科学概論』第三章「数理の基本概念」や第七章「自然科学の数理的方法」あたりの講義を指すものであろう。それに先立って田辺は大正四年（一九一五）に岩波書店から哲学叢書の一巻として『最近の自然科学』を刊行している。これは相対論や量子論を含む当時最新の物理学理論について哲学的検討を加え、自然科学的認識の意義を論じた概説書である。

その「序」において田辺は「最近物理学の理論の大体は、長岡半太郎、水野敏之丞、本多光太郎、桑木或雄、愛知敬一、石原純諸教授の著書、講義、論文」⁽¹³⁾に負うものであることを記している。このうち、本多、愛知、石原は理科大学の同僚である。さらに「此機会に於て余は特に余に講義の聴聞を許された本多教授と、余の質問に日々親切な指教を与へられた石原教授とに対して感謝の意を表したい」と述べている⁽¹⁴⁾。このように同僚どうしが互いの講義を聴講しあうという、当時としては画期的な交流も、開学に当たって澤柳が推進したものであった。すなわち「澤柳はさらに教授たちが相互に刺激し合うことを重視し、教授たちが他の教授の講義を自由に聴講出来るような、自由に開放された雰囲気を作るように気を配った」というのである⁽¹⁵⁾。

田辺がこのような東北帝大の闊達な学風から多くを学び、裨益するところ大であったことは言うまでもない。この田辺の『最近の自然科学』は、思わぬところにまで影響を及ぼした。のちに日本人初のノーベル物理学賞受賞者となる湯川秀樹は、自叙伝『旅人』のなかで次のように回想している。

「私はまだ物理学に十分大きな興味を持っていなかった。数学の勉強に、より熱心であった。(略) 西田幾多郎博士の『善の研究』はずっと前から、多くの若い人々を感激させていた。哲学者の田辺元博士の『最近の自然科学』が哲学叢書の一冊として出たのは、このころであったろうか。この中に『量子論』という言葉が度々出てきた。私には何のことだかさっぱりわからなかった。しかしそこに、何か神秘的な魅力を感じはじめていた。」⁽¹⁶⁾

湯川の記述に基づけば、彼の関心を数学から物理学へ向け換え、さらに量子論への興味を呼び覚ましたのは、まさに田辺の『最近の自然科学』であったということになる。田辺はこの書の特徴を「善き意味に於ての通俗的一般的」⁽¹⁷⁾と呼んでいるが、おそらく湯川のような影響を受けて現代物理学に目を開かれた学生は少なくなかったと思われる。

一九一九年(大正八)に田辺は西田幾多郎に招かれて京都帝国大学文学部助教授に就任し、一九二五年(大正一四)には『数理哲学研究』を岩波書店から出版する。この書は刊行時期こそ遅いが、起稿されたのは東北帝国大学在職時である。田辺自身「自序」において「此書の成るに就いては数学の方面に於て(略)起稿当時私の在職した東北大学に於て、林、藤原、小倉の三博士から種々の教示を受けた」⁽¹⁸⁾と記している。

数学科に所属していた林鶴一、藤原松三郎、小倉金之助らである。それゆえ、田辺元の初期科学哲学三部作、すなわち『最近の自然科学』『科学概論』『数理哲学研究』は、すべて東北大学在職時の所産といて過言ではない。一九六二年（昭和三七）に田辺が逝去した折、高橋里美は『思想』に追悼文を寄稿し、往時を振り返っている。

「田辺君の東北大学におけるこの数年間の研究業績は極めて輝かしいもので、同君の数学並びに自然科学の哲学的研究の基礎をなしたものとさえよう。実に、科学概論、すなわち科学哲学は、哲学とともに数学や自然科学への強い関心と深い造詣とをもつ田辺君によって始めてわが国に誕生しえたといっても過言ではない。」¹⁸⁾

高橋自身は「私もかつてこの学科『科学概論』を受け持ったことがあるが、お茶をにごすだけではないにもならなかったのに、田辺君は美事にそれをものにすることに成功した」と謙遜しているが、まさに日本の科学哲学は、田辺元とともに仙台の地で呱呱の声を挙げたのである。

四 高橋里美と「科学概論」

田辺元（一九一三—一九一九）が京都帝国大学へ転出した後、理学部の「科学概論」の担当者は、小山鞆絵（一九一九—一九二二）、高橋里美（一九二二—一九二四）、三宅剛一（一九二四—一九四六）、和泉良久（一九四六—一九七五）、吉仲正和（一九七九—一九九二）と引き継がれていった（カッコ内は担当期間）。

担当者が不在の期間は、大内義一、吉田忠、井原聡、趙承勲、初山高仁らが非常勤講師を務めている。このうち初期の小山、高橋、三宅らは新たに開設された法文学部へほどなく転出し、のちの文学部哲学科の基礎を築いた。初期の担当者の在任期間が比較的短いのは、科学概論の講座は「半講座」と呼ばれていたように、助教授のみの単独ポストで、教授への道が開かれていなかったことによる。教授昇任のためには、他部局や他大学へ転出せざるをえなかったのである。

田辺の後継者の中で、文学部哲学科との関わりで特に注目すべきは高橋里美と三宅剛一の二人である。両者は師弟関係にあり、ともに東北大学文学部に「現象学の伝統」を形作ることに大きく貢献した。まずは高橋の経歴を振り返っておこう。彼は一八八六年（明治一九）に山形県米沢市に生れ、一九〇七年（明治四〇）旧制一高を経て東京帝国大学文科哲学科に入学。大学院時代に西田幾多郎の『善の研究』を批判した論文「意識現象の事実とその意味」を『哲学雑誌』に発表して一躍注目を浴びた。西田はこの若輩の批判をいささかも軽んじることなく、ただちに「高橋（里美）文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答う」をもって正面から応答した。これは近代日本における初めての本格的な哲学論争と呼べる出来事と言ってよい。その後の高橋の歩みについては、彼自身の筆を借りるとしよう。

「大正四年に凶らずも一高時代からの友人の世話でドイツ語の教師として六高に赴任することになり、ここに始めて私の生活はやや安定したものとなった。四年のち六高から新設の新潟高校に転じた。一年半ばかりでそこから更に東北大学理学部に転じたが、これも一高の先輩、小山鞆絵君の推挽によるものである。理学部では小山君の後をついで科学概論を講じた。そして数年の後、更に新設の法文学部に転じて哲学を担当

することになったのである。³⁰⁾」

この旧制六高（現在の岡山大学）在任時の教え子には三宅剛一や宇野弘蔵（経済学）の名が見られる。のちに宇野が労農事件で検挙されたとき、法文学部長であった高橋が公判庭に証人として立って弁護したのも、そうした縁があつたことである。もう一人の三宅は、その後哲学者として高橋のあとを追うようにキャリアを重ねて行くことになる。高橋の経歴に戻れば、彼は一九二五年（大正一四）から二年間、文部省在外研究員としてヨーロッパに留学している。おもにドイツに滞在し、ハイデルベルク大学ではリッケルトに、フライブルク大学ではフッサールに師事した。とりわけ現象学の創始者エトムント・フッサールの講筵に列したことは、その後の高橋の学問的方向に大きな影響を及ぼした。フッサールについて彼は後年「私を何よりも強く感動せしめたものは、彼が現象学を彼の一生の、また唯一の事業として、これが研究に心身を捧げ尽くし、しかも一個の学的労働者に甘んじ、かつそれをもって任じている真摯な学者的態度であつた」と述べている。実際、高橋は帰国後にフッサール現象学に関する講演や論文執筆を精力的にこなし、一九三一年（昭和六）には『フッサールの現象学』を上梓して現象学をわが国に初めて本格的に初めて紹介するとともに、それを日本の哲学界に根付かせることに尽力したのである。

高橋がフッサールのもとに留学した時期は、ちょうどフッサールが「構成的現象学」から「発生的現象学」への転換を模索していた時期と重なっている。それゆえ『フッサールの現象学』には、「受動性」「連合」「身体性」「運動感覚（キネステーズ）」「間主観的還元」「感情移入」「非現的な空なる表象（付帯現前化）」など後期フッサールが駆使したキーワードが頻出する。その意味で、この高橋の小著を通じて、日本の読者は

のちに『デカルト的省察』（フランス語版は一九三一年、ドイツ語版は一九五〇年に刊行された）などの著作で展開される後期フッサールの現象学に、世界に先駆けて触れることができたのである。

留学中に後期フッサールの現象学に親しく接することを得た高橋が、強い印象と刺激を受けたのは「身体」ないしは「身体性」の概念であった。その核心を彼は「ライプニッツは单子は相互に実際の交渉をなす窓をもたないと考えたが、フッセルは单子は身体性という窓をもっていて、これによって他と関係しうると考える」と的確に要約している。驚くべきは、高橋がその射程を、以下のように「身体性の現象学」の可能性にまで拡張していることである。もちろん、その実現はメルロー・ポンティの登場を待たねばならなかったが、高橋の先見性は驚嘆に値する。

「身体または身体性は一面において延長物であるが、他面においてそれは身体としての身体であって、それに特有なる自我的内面性または身体主観性を有するものである。この内部身体性は、知覚の機関（Organ）であり、兼ねてまた実行の機関でもある。（略）かかる内部身体性は現象学的説明を要する主題であって、そこに自然科学的生理学とは全く面目を異にする身体性の現象学が成立することになるのである。」⁽²³⁾

このような高橋の問題意識を最もよく継承したのは、旧制六高で高橋の薫陶を受け、やがて一九二四年（大正一三）には東北大学の「科学概論」担当を高橋から引き継ぐことになる三宅剛一であった。三宅は身体性の現象学の主題をさらに「人間存在論」へと深化させることによって、日本の現象学研究を新たなステージへと導いた。そして高橋と三宅を源流として、「東北大学現象学派」とも名づけるべき学統が形作られて

行くのである。

五 三宅剛一と「科学概論」

三宅剛一は一八九五年（明治二八）岡山に生れ、一九一六年に旧制六高を卒業、同年京都帝国大学文学部哲学科に入学した。六高時代には高橋里美や立沢剛の教えを受け、京都大学では西田幾多郎、朝永三十郎、波多野精一らに師事した。大学卒業後の三宅は、一九二二年（大正一〇）旧制新潟高校教授、一九二四年（大正一三）東北帝大理学部助教、とすべて高橋の後任として就任する。その後一九三〇年（昭和五）には文部省在外研究員としてフライブルク大学に留学し、フッサールのもとで学ぶが、これも高橋の先蹤に倣ったものと言えよう。一九四六年（昭和二一）東北大学文学部哲学第一講座教授となり、ここでようやく高橋の同僚となるのである（高橋は哲学第三講座）。

このように三宅の経歴をたどっていると、大学卒業後はほとんど高橋の後を襲うようにしてキャリアを重ねてきたことがわかる。高橋はその間、一九四九年（昭和二四）に東北大学の総長に選出され、のち三選を重ねている。他方で三宅は一九五四年（昭和二九）に京都大学文学部哲学科に教授として招かれることになる。三宅の歓送会で彼を慕う学生たちが仙台の地に留まるよう懇願したところ、三宅は「これまで私は高橋先生の後に付き随って人生を歩んできた。このまま仙台に留まれば、先生の後を追って次は総長にならざるをえないが、それだけは勘弁してもらいたい」とユーモアをもって応じたと伝えられる。

三宅の場合もまた、東北帝大理学部で「科学概論」を講じたことは、彼の哲学的経歴のうえで大きな意味

を持っていた。とくにその期間は一九二四年（大正一三）から一九四六年（昭和二一）まで二二年間に及ぶ。のちに三宅はこの時期を次のように振り返っている。

「理学部では、科学概論を講じていたので、数学をはじめとする自然科学の諸分野に親しむことも多かった。この講座は、田辺先生、高橋里美先生のを、はからずも継いだ形となった。大学を出て一年ほど京都一中で英語を教えたあと、新潟高校で論理学やドイツ語を教え、大正末期に東北大学に招かれて、この講座を担当することになった。第二次大戦が終わってから、法文学部に転じたが、戦前から戦中戦後のこの時代は、私の生涯の重要な期間でもあった。戦いの日々も、思索に明け暮れることが多かったように思う。」²⁴⁾

三宅が理学部在任中に執筆・刊行した著作は『学の形成と自然的世界』（一九四〇）および『数理哲学思想史』（一九四七）の二冊である。前者の「再刊の序」には「執筆をはじめたのは昭和八年、岩波講座『哲学』のためであった。当時私は東北大学理学部において、比較的暇があり、約七年間本書の執筆に没頭することができた」²⁵⁾とあり、また後者の「序」には「いまこれを世に出すのは、古衣を日向にさらすような気おくれを感じる。しかし自分としては、理学部において過ごしたながい年月を想ってこの書をささやかな記念としたい心もあるのである」²⁶⁾と記されている。いずれも理学部時代の仕事に対する思い入れのこもった言葉である。

三宅が東北大学理学部で行った「科学概論」の講義ノートは三冊あり、そのうちの第一冊目のノートが中川明博の尽力により翻刻刊行されている。²⁷⁾その緒論において三宅は、科学概論を「科学批判の学としての哲

学」と特徴づけ、それを敷衍して「科学批判とは、科学はいかなる仮定の上に立ち、いかなる方法によってその認識を構成するかということを尋ねるのである」と規定する²⁸⁾。全体の構成については田辺元の『科学概論』を先蹤としているが、田辺が第一章を「意識の現象学的概観」から始めているのに対し、三宅の第一章は「経験と科学」である。しかもその「経験」について、三宅は「この科学的認識以前の直接に与えられた世界は、吾々の普通に経験の世界といつてゐるものであつて、かかる世界を我々に示す作用が経験である」と述べている。このように「直接与えられた世界」を経験の世界と規定する見方は、中川が指摘するように「生活世界と科学的客観的世界に関するフッサールの規定を彷彿とさせる」のであり、それを「生活世界の現象学の試み」と特徴づけることも可能であろう²⁹⁾。こうして三宅は「科学概論」の講義を続けながら、次第に自らの現象学的考察を深化させていく。それは同時に、高橋が示唆した「身体性の現象学」の圏域を「人間存在論」の方向へと展開する道でもあつた。

六 三宅剛一と東北大学現象学派

三宅は一九三二年（昭和七）にヨーロッパ留学から帰国すると、その成果を「ハイデッガー哲学の立場」として東北帝国大学文科会編の『文化』二月号、三月号（一九三四年）に発表した（後に『ハイデッガーの哲学』に収録）。この論稿は、ハイデッガーの『存在と時間』の刊行が一九二七年であることを考えると、かなり早い時期のハイデッガー論と言えよう。田辺元の「現象学に於ける新しき転向」（一九三三年）にハイデッガーへの言及はあるものの、これは『存在と時間』刊行以前の論稿である。三宅の論文は、本格的なハイデ

ガー論としては、一九三三年（昭和八）に発表された九鬼周造の「ハイデガーの哲学」（岩波講座『哲学』）所収の「実存哲学」の後半部、後に『人間と実存』に収録）に次ぐものである。実際、三宅はこの論稿の中で、九鬼の論文に言及している。^⑭

三宅のハイデガー論に特徴的なことは、その同時代性である。彼は「一九三〇、一九三一年にフライブルクの大学に行つて、ハイデガーの講義をきき、またオスカー・ベッカーに『存在と時間』を順序を追つて講説してもらつたりして」いる。そうした見聞から、三宅は『存在と時間』の思想的背景が「ドイツ青年運動」と不可分であることを確信する。「第一次大戦の前後においてドイツの若い哲学者をとらえて新しい途へかりたてたものは何であつたか」と自問しながら、三宅は次のように自答している。^⑮

「すなわち近代科学を中心的契機とする生活秩序あるいは『文化』そのものへの疑い、マックス・ウェーバーが合理化とよんだ原理、言いかえれば近代の西欧的理性そのものの非本原性、問題性の意識であつた。認識論哲学の基礎づけなるものは結局においてこの原理を自明的前提としている。最近における哲学的反省は『近代精神の自己『確実性』の根底そのものへ向けられた。』」^⑯

ここで「認識論哲学の基礎づけ」がハイデガーと三宅の共通の師であつたフッサールの現象学的哲学を指していることは明らかであろう。三宅によれば、ハイデガーの哲学は「現象学的方法の一つの徹底化」^⑰なものであり、さらに言えば「事象そのものへとという要求の下に徹底的自省を方法とする現象学は批判的精神を本領とする」のである。^⑱ そのような観点からすれば、ハイデガーの哲学は現象学的批判精神の一つの現われな

のであり、それは「人間の有限性と歴史的存在性」とに基づく哲学のクリティカル・シミュレーションの反省分析⁽³⁸⁾にほかならないのである。以上のような三宅のハイデガー理解は、かなりの程度『存在と時間』の企図を的確に捉えていると言ってよいであろう。

このハイデガー論を発表したあと、三宅は西洋哲学の歩みをたどりながら自然的世界の成立をめぐる歴史研究に没頭する。その成果が一九四〇年（昭和一五）に上梓された『学』の形成と自然的世界』である。この書によって一九四三年（昭和一八）、三宅は京都帝国大学から文学博士を授与されると共に「国民学術協会賞」を受賞する。この年同時に、三宅は東北帝国大学法文学部哲学第一講座を兼務するが、その前年に法文学部特殊講義として口述されたのが「幻の名講義」と称される「ドイツ観念論に於ける人間存在の把握」である。幸いにも、この講義は詳細なノートが残されており、酒井潔と中川明博の手によって翻刻・解説がなされている。⁽³⁹⁾この講義は、三宅が「人間存在」という主題を明示的に把握した出発点という意味でも貴重である。その「序論」では、デルタイの「現代の文化と哲学」を下敷きにした形ではあるが、三宅自身がその問題意識を次のように披瀝している。

「実証科学は以前の諸世紀の宗教的信仰と哲学的確信との基礎をなした諸前提を崩壊させ、歴史研究に伴ふ歴史的意識はあらゆる形而上学及び宗教の教義の相対性を意識せしめた。現代では一方に科学の支配的力、実証的研究の旺盛さがあり、他方に人間が自己の存在の意識に関する問いに対して答ふところを知らない精神の無力さがある。この悲劇的な不調和が現代の精神及びその哲学に於ける最後のさらに最も独自の特徴である。」⁽⁴⁰⁾

これが先のハイデガー論における時代状況の把握と問題関心とに通底するものであることは言うまでもない。だが、三宅はハイデガーやディルタイの解説や注釈をもって能事畢れりとするような哲学者ではなかった。彼は一九四六年（昭和二一）に東北帝国大学法文学部、後の新制東北大学文学部に配置換えになるに伴い、西洋哲学の歴史研究から徐々に主著『人間存在論』（一九六六）に結実する独自の体系的考察へと歩を進める。その第一歩となったのが、「現実と歴史」（一九四八）や「人間存在と身体」（一九五六）など一連の論文である。とくに後者は、『人間存在論』第一章「人間存在と自然」の内容と密接に関わっている。

三宅の現象学的考察の出発点は、「主体としての我々は身体を持つ主体である」というところにある。その内容を敷衍して、彼は「我々が身体をもつ主体として世界に臨んでいる或いは世界の中に在ることが、見られる周辺の世界、道具の世界を、そういうものとして現し出すことなのである」と述べている。ここには後期フッサールというよりは、むしろハイデガーの影響が歴然としているが、三宅自身が参照しているのは、メルローポンティイの『知覚の現象学』であることは注目に値する。というのも、戦後すぐの時点ではメルローポンティイは、わが国ではまだサルトル流の実存主義の亜流と見なされていたからである。それを「身体の現象学」という文脈で論じていることは、まさに慧眼と言わねばならない。

一九五四年四月に、三宅は京都大学文学部哲学科教授に招かれて仙台を離れる。東北大学理学部で「科学概論」を担当したのが二二年に及んだのに対し、文学部哲学科で教鞭を執ったのはわずか八年にすぎない。しかし、その間に教え子たちに与えた影響には甚大なものがあつた。おそらく弟子たちがメルローポンティイの現象学への関心を呼び覚まされたのは、三宅の示唆によるところが大きいであろう。やがてメルローポンティイのわが国への導入と翻訳に大きな役割を果たした滝浦静雄と木田元は、『行動の構造』の「訳者あとがき」

で次のように述べている。

「最後に私事にわたって恐縮であるが、訳者たちがこの訳業を思い立ったのは、東北大学御在任中から今日にいたるまで、変わることなく訳者たちを見守りつづけて下さり、やがて来春は古稀の寿を迎えようとしておられる三宅剛一先生の深い学恩に、感謝のせめて微意を表したい一心からであったことを、記しておきたい。⁽⁴¹⁾」

また彼らとほぼ同期であり、同じく三宅の薫陶をうけた新田義弘は、『現象学とは何か―フッサールの後期思想を中心として―』の「あとがき」で、「本書の出版にあたり、これまで現象学をはじめいろいろと学問上のご指導を賜った三宅剛一先生に対してこれを機会に感謝の意を捧げておきたい」と記している。この滝浦、木田、新田という三宅門下の逸材三人がのちに東北大学の「現象学三羽鳥」と呼ばれ、一九六〇年代半ばから一九七〇年代にかけて、日本における「現象学ルネサンス」の運動を領導したことは、知られるとおりである。⁽⁴²⁾ そのことは、この現象学ルネサンスを総括すべく編まれた『講座・現象学』の編者が、木田元／滝浦静雄／立松弘孝／新田義弘の四名であったことから窺い知ることができる。⁽⁴³⁾ もちろん、立松は三宅門下ではないが、フッサールの主要著作の緻密な翻訳で知られており、わが国の現象学ルネサンスに欠くことのできない研究者であった。

このように見てくると、東北大学における哲学研究は、三宅剛一を回転軸として、「科学哲学の伝統」から「現象学の伝統」へとゆるやかに旋回していったことがわかる。もちろん書き残したこと、付け加えたい

ことは多々あるが、そのことを確認し終えたところで、いったん筆を擱くこととしたい。

[注]

- (1) 新田義之『澤柳政太郎』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、一四三―一四四頁。
- (2) 同前、一四四頁。
- (3) 同前、一四六頁。
- (4) 新田義之『東北大学の学風を創った人々』東北大学出版会、二〇〇八年、二八頁。
- (5) 『田辺元全集』第二卷、筑摩書房、一九六三年、一五七―一五八頁。
- (6) 同前、一五九頁。
- (7) 同前、一七〇頁。
- (8) 同前、一七五頁。
- (9) 新田義之『澤柳政太郎』前掲書、一五一頁。
- (10) 丸山久美子『双頭の鷺―北條時敬の生涯』工作舎、二〇一八年、一七〇頁。
- (11) 新田義之『澤柳政太郎』前掲書、一五三頁より重引。なお、この文章の出典は「朝日新聞昭和四十五年五月三十日」と記載されているが、筆者が朝日新聞縮刷版を検索したかぎりでは該当記事は見当たらなかった。あるいは地方版に掲載された記事かもしれない。
- (12) 本多光太郎『物理学本論』内田老鶴圃、一九四〇年、「序言」
- (13) 『田辺元全集』第二卷、三頁。
- (14) 同前、四頁。
- (15) 新田義之『澤柳政太郎』前掲書、一四九頁。
- (16) 湯川秀樹『旅人 湯川秀樹自伝』角川文庫、一九六〇年、一一八頁。
- (17) 『田辺元全集』第二卷、三頁。

- (18) 『高橋里美全集』第七卷、福村書店、一九七三年、一九九頁。
- (19) 同前。
- (20) 同前、一二三頁。
- (21) 同前、二四〇―二四一頁。
- (22) 『高橋里美全集』第四卷、三三―三四頁。
- (23) 同前、三四―三五頁。
- (24) 三宅剛一『経験的現実の哲学』弘文堂、一九八〇年、i頁。
- (25) 三宅剛一『学の形成と自然の世界』みすず書房、一九七三年、ix頁。
- (26) 三宅剛一『数理哲学思想史』学芸書房、一九六八年、iii―iv頁。
- (27) 中川明博(編)三宅剛一『論理学講義(新潟高校講義)』科学概論』学習院大学、二〇〇八年。
- (28) 同前、六二頁。
- (29) 同前、六五頁。
- (30) 同前、x xi頁。
- (31) 三宅剛一『ハイデッガーの哲学』弘文堂、一九七五年、三三―三四頁。
- (32) 同前、I頁。
- (33) 同前、四五頁。
- (34) 同前、四六頁。
- (35) 同前、八九頁。
- (36) 同前。
- (37) 酒井潔・中川明博(編)『ドイツ観念論に於ける人間存在の把握』学習院大学、二〇〇六年。
- (38) 同前、二頁。
- (39) 三宅剛一『人間存在論の哲学』燈影舎、二〇〇二年、四七頁。
- (40) 同前。
- (41) 「訳者あとがき」、メルロロポソティ『行動の構造』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、一九六四年、三六八―三

六九頁。

(42) 新田義弘『現象学とは何か』紀伊国屋新書、一九六八年、二〇一頁。

(43) これら三羽鳥に加えて、彼らよりやや年長で、当時三宅の助教を務めて将来を嘱望されていた松本彦良の名を挙げておくべきであろう。松本は『東北大学文学研究科年報』第四号、一九五三年にフッサールの『危機書』に関する論考を寄稿しているが、これは『危機書』を主題的に論じたおそらく最初の邦語文献である。三宅は『数理哲学思想史』の「再刊にあたって」（一九六八年）の中で、「本書の原稿を整理してくれた松本彦良君が亡くなってからもう十年になる。いまさら歳月の流れを感じると共に、同君の思い出を新たにするのである」と記してその早世を惜しんでいる。

(44) 木田元・滝浦静雄・立松弘孝・新田義弘（編）『講座・現象学』全四巻、弘文堂、一九八〇年。

〔付記〕本稿は二〇一九年七月一三日（土）に、石川県西田幾多郎記念哲学館主催、東北大学史料館共催、東北大学附属図書館協力のもとに行われた事業「西田幾多郎と東北大学ゆかりの人々」における私の講演「東北大学と科学哲学の伝統」をもとに起稿したものである。ただし、講演の前半部で紙数が尽き、後半部については他日を期したい。

（のえ けいいち・東北大学名誉教授／立命館大学客員教授／河合文化教育研究所主任研究員）